

クルド人とクルディスタンに関する読書案内

能勢 美紀

世界中でテロの脅威が叫ばれるなか、「イスラム国」に対して戦う「クルド人」武装部隊（「ペシユメルガ」）がにわかに注目を集めている。シリアとトルコ国境の町、コバニ（アイン・アル・アラブ）での攻防戦とクルド人部隊の勝利については記憶に新しいのではないだろうか。

一方で、「クルド人」とはどのような人々なのか、そして彼らが「イスラム国」に対して勇敢に戦う背景には何があるのか、といったことについて、メディアは多くを伝えていない。「イスラム国」はスンナ派のイスラム原理主義集団、という理解から、クルド人をシーア派であると誤解している人々は世界的にも多い。しかし、クルド人において多数派なのは実はスンナ派であり、そもそも「イスラム国」との戦闘は「宗派対立」ではないのである。

本稿では、メディアを通じてはなかなか理解できないクルド人と彼らの住む「クルディスタン」の歴史・文化を知るための資料を紹介し、事件を理解する手助けとなることを目指したい。同時に、「イスラム国」との関係でのみ語られがちなクルド人とクルディスタンについて、身近に感じてもらえれば幸いである。クルド人はトルコ・イラン・イラ

ク・シリアを中心に、その国境地帯に暮らす民族である。「国境地帯に暮らす」のは、彼らの居住地「クルディスタン」がこれらの国々の国境線によって分断されているからに他ならない。

S・C・ペレティエ（著）、前田耕一（訳）『クルド民族…中東問題の動因』（亜紀書房、一九九一年）

は、一九八〇年代に至るまでのクルド人の歴史と、イラク・イラン・トルコの各国における状況をバランスよく解説している。残念ながら、日本語訳には引用文献目録がついていないが、クルド人についての基礎的な歴史および状況を整理したもので、まず参照すべき書のひとつである（また、引用文献については、原著を参照することを知ることができる。Stephen C. Pelletiere, *The Kurds: an unstable element in the Gulf, Boulder, Westview, 1984*）。

川上洋一『クルド人もうひとつの中東問題』（集英社新書、二〇〇二年）は、新書で入手しやすく、読みやすい。元新聞記者の視点および経験をもとに、国際紛争・問題という観点からクルド人と「クルド問題」に焦点をあてている。ニュースや新聞報道を理解するための基礎的な知識固めとしておすすしめしたい。

クルド人と彼らのおかれる状況は各国において異なる。そのなかでも特にトルコのクルド人が直面している問題を分析した書として、イスMAIL・ベシクチ（著）、中川喜与志・高田郁子（編訳）『クルディスタンⅡ多国間植民地』（柘植書房、一九九四年）があげられる。著者はトルコ人社会学者であり、本書の執筆当時、「クルド人問題」を取り上げることがタブーであったトルコにおいて問題提起した渾身の書。トルコ人でありながら、トルコのクルド人に対する対応を的確に批判・分析した。日本語訳があるのは今のところ本書のみだが、著者はこの他にもクルド人およびクルディスタンを扱ったいくつかの著書を出版しており、そのために獄中生活も経験している。

繰り返しになるが、クルド人はイラク戦争や対イスラム国との関係で語られることが多いが、実際には多くのクルド人が私たちと同じように日々生活し、家族と語り、友人たちと遊び、学校にも通い、テレビを見て談笑するのだという当たり前のことを見落としがちである。そうしたクルド人に日常にふれ、身近に感じるための書物として、以下のものを紹介したい。

勝又郁子『クルド・国なき民族のいま』（新評論、二〇〇一年）は、イラクのクルド人を中心に、著者が実際に交流したクルド人たちとの体験を含めて、クルド人を描いた良書。

普段あまり伝えられることのないクルド人の日常生活や文化にふれることができ、クルド人をより身近に感じられるのではないか。一方で、彼らの厳しく悲惨な歴史についても学ぶことができる。

トルコのクルド人および「クルド問題」を扱ったものとしては、小島剛一『トルコのもう一つの顔』（中公新書、一九九一年）がある。著者は言語学者であり、言語学者の視点からトルコとそこに暮らすクルド人について紹介している。本書は著者のトルコでの生活および研究をもとに執筆されており、先に紹介した勝又氏の著書同様、トルコにおけるクルド人の日常生活と彼らの直面する困難について鮮明に描かれている。

本書には続編として、小島剛一『漂流するトルコ——続「トルコのもう一つの顔」』（旅行人、二〇一〇年）もあり、およそ二〇年を経てトルコにおけるクルド人と彼らのおかれている状況がどのように変わったのか、その変化を追うことが可能である。あわせておすすしめしたい。

クルド人について日本語で読むことのできる資料は残念ながら多くとはいえないが、それでもこれらの著作はこれまでのクルド人に対するイメージを大きく変える一冊になるのではないだろうか。

（のせ みき／アジア経済研究所 図書館）